

ぼっちの黒春学生Life  
～青春？恋？そんな  
ものは残像だ～

村六分

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

クラスメイトの汚点ごと俺佐藤深海は負の3K（キモイ、クサイ、嫌われもの）の持ち主であるが故に日々常頃から理不尽かつ孤高な黒春学園生活を余儀無くされていた。

しかし転機が彼にも訪れる。二年になり東京から転校生がクラスに招かれた。成績優秀な上に容姿淡麗、ギターも弾けちゃう非の打ち所の無い正にパーフェクト都内JK。そんな高嶺の花に縁など有るまいと思っていたがまさかのまさかでえ、なんでこっち見て微笑むの……！。惚れてまうやろおおい！

ここに冴えないぼっち男子高生の逆転リア充Lifeが始まる……のでしょうか？

※この物語は俺ガイルと私め村七部の学園生活を足して割って混ぜたような内容です。冴えないぼっちの生活を温かく見守ってやってくださいませ。パロディネタも豊富に使う予定です。

# 目

# 次

プロローグ 4	プロローグ 3	プロローグ 2	プロローグ 1
24	11	6	1

# プロローグ1

世の中とは理不尽に満ちている。

私ごとうp主をモデルとした深淵の闇に眠れし孤高の騎士(ぼっち)、佐藤深海は常日頃からそう思う。

海のように深い心の持ち主になってもらいたいという両親の嘆願の元頂いたこの名前だが、現実はその甘くないのである。

どこから説明したら良いか分からないが、とりあえず簡単に俺の人物像を語っていただくではないか。

先程書いたように名前は、佐藤深海。ある意味3Kの持ち主だ。

お察しの方もいるかも知れないがKとは高身長、高収入、高学歴ではない。

ではなにかというトロー。

Kー、キモい。

Kー、クサイ。

Kー、嫌われもの。

以上。いや、異常だ。

それ故に日々日頃から理不尽なぼっちLifeを謳歌させられている。

具体的に例を挙げるならば挨拶の様に「キモイ」や「死ね」「近寄らないで」と真剣な顔で言われたり、体育の授業の為に体操服に着替えようとすると女子更衣室があるにも関わらずに教室で着替える女子生徒に俺だけ追い出されてしまったり、文化祭の仕事を押し付けられたりなど切りがないだろう。

原因は幾つも考えられるが一番大きいのはそんなキモイ雰囲気や常時醸し出しているからか。運動音痴な上不器用で頭が固いからか。何れにしてもこんなめんどくさそうな人間と関わりたいという人はギザ十並みに希少である。

ならどうしてこんなに辛い目にあっている

のに意地でも学校に来ているのか疑問に感じるかい？進学したい学校への合格率が高いことやくそ真面目に今までめげずに登校してきた勲章である皆勤賞が惜しいというところもあるけれども……。

「はいはい……」

誰もいなくなった昇降口で一人の童貞が薄気味悪く笑みを浮かべる。その手には一通のハートマークのシールが貼られた便箋が握られてた。

「はははは……」

そう。遂にやって来たのです皆さん！一生童貞を約束されたようなある意味神に選

ばれた男にもやって来たのです！

「キタアアアアアアアア！ラブレターアアアアアアアア！モテ期到来ってかああああ！いいね〜！いいね〜！さいっこーだねえ〜！」

キヨロキヨロと周囲を見渡し人がいないことを確かめる。誰かに見つからないように急いで封筒を開く。すると女子特有の可愛らしい丸文字で『4月1日中央公園の噴水前で待ってます』と書かれている。

来ましたあ！やはり天は我を見放していなかった。人は人生に2度モテ期は訪れると考えられている。所詮こんなのはスイートリア充（笑）の戯れ言だとたかをくくっていたが強ちそんなことはないようだ。ありがとう！恋の神様！

「さて、そうと決まれば準備をせねば……。今日は終業式だから4月1日までは2週間つてとこだな……」

人生一成一大……。いや二成二大のチャンスこれを逃したらいつ次が来るか分かったもんじゃない。ひよつとしたらこの機を見逃して次が来てもその次も駄目かもしれない……。い……い……

そうだ。やれることは全て尽くそう。何かのためと必死に貯めた豚の貯金箱のお金を贅沢に使って美容院行って髪をセットしたり、服を新調したりとやることは山ほどだ。

思い立ったが吉日と俺は興奮した勢いに乗って全力疾走で帰路へと向かう。

「待ってろよお！マイワイフ!!! 漢、佐藤深海男を磨いて参ります!!!」

顔も知らぬ将来の妻に向かつて愛を叫び走る俺の姿は恐らく端から見れば異常な光景だったろう。それでも俺は走る。何故って？それは俺を呼ぶ声があるからさ！

.....

.....

.....

「由美子ー。あんたのいった通りアイツまんまと乗せられてんの！マジウケル〜」

「真由美でしょー！あの異常に嬉しそうな顔マジキモイっての。ははははは!!」

二人の小悪魔が俺が走り去ったあと一連の行動を思い出して嗤う。確かに自分達の思惑通りに事が進んだのだから面白くないはずがない。獲物が引つ掛からない釣りほ



どつまらないものはないように。

この時俺は人生最大にして最悪の黒歴史を新年度早々に打ち立てるとは微塵も思っ  
てなかった。

## プロローグ2

「遂にこの時が来るとはな……」

俺はトンカチを片手に握りしめ感慨深い瞳で小学生の頃から家事の手伝いやお年玉を少しずつ貯めていった豚の貯金箱——トんちゃんを見つめる。

こいつとは長い付き合いだった。出会いは小学生1年生の時の誕生日父さんがプレゼントに買ってくれた時だ。始めは原寸大の豚の貯金箱など愛らしい見た目に反してなんて凶悪なんだと項垂れたもんだ。とうか親は一体どれだけ俺に貯金をさせたがつてたんだ……。小さい頃の事だからあんまり覚えてない。まあ、どうしようもない理由だった気が……。

「お兄ちゃん一体何してんの。超不気味なんだけど……」

つとどうでもいいことに思考を巡らせていると目の前になんとまあ可愛らしい女の子がいるではありませんか。我が愛しの妹美紀その人である。一応言っておくが連れ子にお兄ちゃんプレイを要求している訳ではないからね……。ホントだからね！

「まあ、色々あってトんちゃんとそろそろお別れしようかと考えていた所だ」

「えっ！お兄ちゃんがあんなに大事にしてたこれを！一体なんがあったのさね！」

「ツフ。まだお子ちゃまにはちとスパイスが効きすぎてから辞めておくのが身の為だぜ」

キメ顔で腕組みをする。

「あーそうゆう無駄なカツコつけどうでもいいから。さっさと話してみそー」

とのことです。美紀ちゃん最近なんかお兄ちゃんに冷たいなー。お兄ちゃんなんか寂しいでござる。まあなんやかんやで話しちやうんですが。

「ぞつくり言うと、モテ期がきた」

「えっ……」

俺がそう言った途端、美紀がフリーズした。なんか有り得ない物を目の前にしているかのよう。

「えっと……。聞き間違えかもしれないからもう一回言ってくんない？」

「だからモテ期が来たんだって！M・O・T・E・K・I。ほれ、ラブレターだって貰ったんだ」

俺は自信気に美紀にラブレターを押し付ける。

「どれ……。拝見しようではないかね」

美紀は桃色の手紙を顔に近づけてまじまじと鑑定をする。しばらく眺めると「これは……」とか「いや、それは筈は……」と唸る。

ミーキティ……。一体どうしたというのだ？

「単刀直入に答えるとお兄ちゃん……」

ゴクリ……。

「これ偽物だよ。おおよそお兄ちゃんのことよく思っていない人が書いたんじゃないかな？」

な……。なんですとおおおおお!!?

「いいいいいいやミキティー。一体全体どしてそう考えるのでせうか？」

衝撃の返答に驚きのあまり声が裏返ってしまった。落ち着けー。stay cool

oooooooo!!

ヒッヒフー、ヒッヒフー。深呼吸、深呼吸。

これラマーズ呼吸法！おっと妊娠なんてしとらんな。俺は男やで。

「まずさ、宛名が無いのが怪しいのが1つ」

「うぐつ……。確かに、でもきつと照れて書けなかつたんだよ！そうだ、そうに違いない。そうであつてくれ」

「お兄ちゃん願望が含まれてるのは気のせいかな……。まあいつか。2つ目は極端に丸文字で書かれているのが怪しい」

「いやいや、女子は大抵丸文字やろう？」

俺を經由して渡ってくる女子同士の文通なんかもそうだよね！あれ頻繁にくるから授業の邪魔なんだよなあ。

「甘い。甘すぎるぞお兄ちゃん。自称プロフェッショナルぼっちの名が聞いてあきれられる」

何やら自信に満ちたどや顔で言う。

「なんだよ。丸文字〓女子の字で合ってるんじゃないのか」

「温い……。そんなの女子に代筆させればいいだけの話でしょ。自称プロフェッショナルぼっちが聞いて呆れちゃうよもう」

はあああつと盛大な溜め息をつく愛しのマイシスター。

「そんな……。俺は騙されてたのか……？」

「うん、100%そう。前にもそんなことあったじゃんか」

「アレーミニオボエガアーリマセン」

エセ外人つぼく言ってみたり。

「覚えてないって言うなら私が懇切丁寧に思い出させてあげるよ。あれは小学4年の……」 『ストオオッ！』

美紀が語り出すのを間髪入れずに止める。このままでは俺が危ない。(精神的に)

「分かった……。一応その可能性も頭の隅に入れておくよ、美紀」

「最初からそう返事すればよかったものをねえー。手のかかる愚兄貴ですなあー」  
「すまんねえ……」

腑に落ちないがここは話を合わせておこう。でないと何時まで経っても本題に入れない。

「んで、相談したいことは偽造ラブレターの黒幕達の撃退方法と万が一リアルラブレターだったときの為のおめかしつてところかね？」

「まあ、そんなところ」

前者は要らんが。

「トンちゃんにどれだけお金貯まってた？」

「ちつと待てまだ数えてるとこ」

「んじや。まずは精算から始めますかー」

やるぞーおー！つと二人で気合いを入れ実物大の子豚の貯金箱に入った金額を精算するのであった。結果としては5万と少しといったところだ。いやー小銭ばつかで使いくそう……。

金額を踏まえた上でおめかし+偽造ラブレター対策に必要な物品をリストアップして明日隣の某ショッピングモールに買い出しに行くことにしてその日は解散した。

## プロローグ3

早朝、俺は来る日に向けて準備を整える為に隣街のショッピングモールに向かうべく電車に揺られていた。

その途中、膝の悪そうなお爺ちゃんが杖でギリギリ重心を保っていた。ここは紳士力の見せ所だと感じ柄にもなく席を立ち。

「お爺ちゃんよかつたらどうぞで」

と席を譲ろうと手を差し伸べたのだが……。

「……のか……」

「ん？」

何やらぼそぼそ言っている。ははん？さてはシン様の紳士パワーに感動して言葉を失うって……！

「ワシを年寄り扱いするなああああああああッツツ!!」

お爺ちゃんは差し伸べた腕に肘打ちを放った！

「ゴあああああッツツ!!」

クリティカルヒット！筋に入った！

深海は12の肉体的ダメージ、999999999の精神的ダメージを受けたっ!

「全く、これだから最近の若い衆は!昭和の人間の気持ちがあかつとらん!いいか、ワシはまだ85じゃあああああ!足腰もピンピンしとるわい!」

その割りには危うい体勢だったような気が……。

「キッ!!」

老人に余計な事を考えたのが悟られたのか鬼の形相もよろしくで睨む。ヒエヒエエエエエ怖い……。思わず内股になつてしまふ。

「今お前。このクソジジイうるせえなあとか思つたらう!」

「いやいやそんな滅相もなー」

「いいわけ無用じゃあああああ!」

その後俺はやつてもない思つてもない冤罪で延々と説教を喰らわされたのであつた。

そのせいで幾つも目的の駅から遠ざかつてしまいショッピングモールに着いたのが結局お昼過ぎであつた。乗り継ぎの料金も掛かつたし本当最悪な出だしだ。あのじじい許すマジ。

……

「はあやつと終わつた……。乗り継ぎ料金のせいで飯も食えんかつたしはよ帰りましよ

……」



あれから約束の日（意味深）の準備に服装、ヘアークット、万が一偽造ラブレターだったときの対応策に秘密兵器の電子機器を買って貯金箱にあつた金はもう底を尽きかけていた。まだ、帰りの電車賃があるだけ幸いだ全く。

食事も無しに慣れない高級そうな店に行つたのだからもう精神的にも肉体的にもぼろぼろだ。

まず、服屋。ユニ○ロやしま○ら以外のブランドの服屋なんてまず店のシャレオツな雰囲気からしてコミュ症の俺には敷居を跨ぐのすら辛い。だというのに、余計な気を使つてくれた店員が「何をお探しですか？」つてニカツとリア充スマイルをくれたもんだから非リアの俺は「あつ、えちよ……。これをお願いします！」つてマネキンが着ていたオサレグッツ一式買うことになつてしまつた……。止めに自動ドアまでのお見送りわざわざ買ったものまで持つていく傍迷惑なサービス付きで。店を出てからも後ろを振り返つたら俺が見えなくなるまで深々頭下げてるし。真心もここまで来ると流石にドン引きである。

次いで、美容院。普段は行き付けの床屋でおっちゃんに「何時もので」つて言えば通じるが服屋同様にオサレ空間なここではそうは問屋が降りない。なんか洒落たパツキンのアンちゃんらの間に座らされて1時間以上待たされた。皆ファッション雑誌やスマホを片手に髪をイジイジしてカッコつけて俺もの凄く場違いでした。やつと俺の

ターン！席に着いてから「5分の丸刈りで（キリッ）」と店員にお願いしたらなんか珍獣に遭遇したような表情をされた。なんか可哀想なってきた（主に俺）「やっぱ、お任せで……」と言い直した時の店員の安心仕切った顔に切なさを感じてしまった。だけでも、百戦錬磨の孤高の学徒たる俺はその程度ではめげなかったのさ！衝撃シーンがこれだ。「シャンプーと顔剃りどうしますか？」

店員は問う。

「両方お願いします。シャンプーは炭酸水でね（キリッ）」

俺は答えた。

この時の俺は勝利を確信した。っふ！見たか、俺だつてやればきんだ……！

しかし、現実はそう甘くなかった。

何故か店員の表情は固まっていた。

アレー？オツカシイナー？来んなハズジャナカッタノニ。

余りのショックに心の中でエセ外国人風に呟くのであった。

……………

結局、炭酸水は止めにしてカットが終わったら会計をそそくさと済まし足早に美容院を後にした。

それから電気屋で秘密兵器を購入し今に至る。

ん？秘密兵器は何かって？それを聞くのはやぶさかですぞ旦那。秘密兵器は秘密であってこそその兵器ですからな。

「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしています」

お約束の台詞を背に店を出る。バスで駅まで行きたいところだったが懐が淋しい。歩いて行けない距離でもないから健康の為に歩きますかなあ。

.....

徒歩20分やつとこさ駅に到着。春休みだから近郊地域にしてはそこまで駅混み合っておらずスムーズに電車に乗車できた。

「あらーやっぱこうなるのね……」

駅は混んでなくとも電車は満員であった。残念……。まだ、近くに可愛い女子高生でも入ればおっさんの加齢臭と中和されるのだが……。ー。

そんなバカな事を考えていたら天使が舞い降りた。

「すいません……。ちよつと通ります……」

控え目な姿勢で人混みをより分けて少しずつ移動していく少女。なんということだ。俺と肩が触れる位置までくるではないですか！これは……。ー。やっぱりモテ期かー。いや、だが俺には既に……っ！んなわけないな。

一瞬で高揚が冷めてしまう。よく思い出せ。俺は厳つくおっさんみたいな顔して  
るから痴漢の犯罪者に置換されそうになったことが

しばしば……。この手の年頃女子は少し当たっただけで痴漢扱いする発情期だから  
細心の注意を払わないとサバンナの中のオワシスどころがー。

よし決めた。俺は荷物を背負い両手で吊り革を強く握りしめた。これで俺が痴漢に  
置換される可能性は減った。もしされても吊り革を握ってたから無理だと言い切れる。  
更に俺の手汗は常人のそれを優に越えているために吊り革がしっとり濡れて握ってい  
た証拠になるのだ！どうだ！この完璧な痴漢置換対策。パーフェクトっ！

それからずつと吊り革を握り締めて腕を上げていたため腕を吊ったのを我慢しなが  
ら目的地を待つのだった。

.....

「あああつ……」

何やら少女から喘ぎ声が発せられる。念の為に言っておくが俺は何もしていない。  
人混みが邪魔で状況が分からないが何やら彼女の背後が怪しい。

少女は尻の辺りを必死に抑えている。背伸びをしてみると小太りの中年が少女の桃  
の様な尻をまさぐっているのを発見。中年の手は徐々にスカートの中に伸びていく。  
少女はスカートを抑えて浸入を防ごうとするが男になにか囁かれるとビクンッと反応

し抵抗が弱くなった。

それを好機と思つたのか男は一気にスカートへと手を伸ばし……。

いかん！見惚れてる場合ではない。至急助けにいかんと少女の貞操がアカン！

中年男の元へ歩みを進めようとするが、途中で止まってしまふ。

——今朝みたいに大きなお世話かもしない……。

今朝の老人のような件もある。更に以前も痴漢の毒牙から助けに行つたことあるが、結局余計なお世話、大きなお世話だつた。感謝どころが返つてくるのは罵倒か無視。世の中誰かがやらねばならないことは沢山ある。俺が毎度毎度その『誰か』である必要性はあるのだろうか？善意が悪意で返つてくる事に何の意味があるのだろうか？答えはどちらもノー。世の中何処かしらで歯車が合うようにうまく出来てるのだ。そう俺がやらなくとも『ヒーロー』は必ず現れる。

だが。

気に食わない。こんな密集したところだ。俺以外にも気付いてる輩はいる筈だ。だが、なぜ動かない？きつと自分以外の誰かが何とかしてくれらるだろうと居もしない誰かに無責任な期待を寄せて自分達は安全な高みから傍観してる奴らがそれ容認している腐つた世の中が気に食わない。昔から人は自分が最後には可愛いのだ。だから多少理不尽だつたり、悲惨な事でも他に押し付けられる人間の本质だ。そのせいである時、アイ

ツも………。

「大きなお世話、大いに結構。考える前に動けつてか……」

溜め息を1つして、痴漢男に近寄り腕を掴んだ。

「ひっひええ!!」

「おっさんなにやってんの?てか、ナニをやってたのか?」

「くっ、放せ。手を放せ!」

男は掴まれた腕を振り払おうするが無駄だ。俺の握力は60kgだ。元柔道部なめんな。

「駅員さんこの人なんか変です!ちよつと来てください!」

大声で叫ぶ。周囲もざわめき始める。これだけの目の中見られてんだ。もう詰みだおっさん。

『間もなくー〇〇〇ですー』

アナウンスが次の駅が近いことを知らせる。おっさんをそこにしよつぴいて後は駅員に任せて自慢のステルスぼっち(影の薄さ)でトンずらしようと思ったの矢先にー。ツルツ。ガシツ、スルツ、ペツチン!

この擬音4つで何が起こったのか想像できた素晴らしい。ズバリ、油断してたら手首の返しで拘束から痴漢男に逃げられてしまい、あろう事か俺の手が先程までの痴漢男の

手の位置つまり少女のスカートの中に滑り込み更にパンツと肌のギリギリ境界線に入り直に尻に触れてしまっているのだ！

故に。

「キャアアアアアアアアア！」

平手打ちがクリティカルヒット！

「<sup>（</sup>こ<sup>）</sup>こで捕まるかってんだ！」

男が扉が開くと同時に走りだす。

「くそ待って！」

俺もすかさず追跡しようとする。しかし。

「待って！君待って！お願いだから！」

何故か少女が制止を求めてきた。

「でも、早くしないと逃げられちまう……。ごめん！」

痴漢男の後を追おうとするがー。

ビリッ。何か繊維の破る音が聞こえた。

音発生源を辿るべく後ろを振り返ると。

「Wow……」

そこには、パンツを剥ぎ取られてスカートを涙目で必死に引っ張って隠そうとする銀

髪の女子高生とその戦利品を高々握りしめた真の変態がいた……。いや、俺だそれは。

.....

その後の展開は早かった。他の駅員が何やら強引に改札口を通ろうとしている男がいたため取り押さえて警察を呼び、無事逮捕されたようだ。

俺も色々と聞かれたり罵られたりしたが、少女に反省の意を全身全霊の土下座で印したらなんとかお許しが貰えた。

事情聴取がやつとこさ終わって解放されなりうきで少女と一緒に帰路へ。

「.....」

謎の沈黙。ヤバい、気まずい……。

「あの一！」

「うっす……」

折角あちらが沈黙を破ってくれたのに思いがけず薄い反応をしてしまう。

「えつと……。助けてくれてありがとうございました。バタバタして言うタイミング逃しちゃってやつと覚えてよかった一」

えへへー。とはにかむ少女。……、可愛すぎやる惚れてまうやる！

「いや、助けに言ったはいいいけど変なところ触ってしまった上にあるうことかパンツを一」



「あああああああああ！言わなくていいからあ！なに言いたいかは察しがつくからそれ以上いわないで……。恥ずかしい……。」

少女は朱色にほつぺを染めてスカートの裾を抑える。

「あ、ごめん！今ノーパン……」

「いやああああ！そうだよお！パンツ履いてないからスウスウして落ち着かないのお……！もうやだお家帰る……。いや、死のう死ぬしかない……」

「待て早まるなああああああ！」

そんなあこんながしばらく続き。

「落ち着ち着きました？」

「取り乱してごめんなさい……」

「こつちこそ、すいません……。じゃあ、邪魔者は早急に消えますので。では」

そう言う俺は足早にその場を去ろうとする。しかし、腕を何かに捕まれて阻まれる。

「待って！その……。何かお礼がしたいので連絡先教えてくれませんか？」

「なぬっ!？」

ちよとまってお姉さん。悪意は無いとしても変な事をそれも一生のトラウマに成りかねないレベルの事をされたのにそれでも尚痴漢を撃退したお礼がしたいと……。

女神…、いや天使だ。

少女を改めて見ると外国人なのかスカイブルーの大きな瞳と雪のように白い肌と腰の辺りまである髪が特徴的だ。更に細過ぎず太過ぎない適度な肉付きの健康美な体格で美しい曲線を描いている。ようは、どこそのアイドルといっても良いほどの容姿だ。

そんな美少女とお近づきに成れる好機？

だが。

「いやいや！お礼なんかいいつすよ。俺も役得だったからお相手つてことで。冴えない童貞に喜びをありがとう！サラダバーっ！」

俺は腕を振り払って颯爽と去ってゆく。そうさ、彼女のようなりア充は俺みたいなのと関わっちゃ折角の青春の1ページが汚れちまう。これがベストなはず。

と自分に言い聞かせるのであったが、後に盛大に後悔してしまうのだろう。

全くコミュ症は嫌である。

……………

「行っちゃった……」

なんかサラダバーを求めて恩人たる少年は風の如く去ってしまった。

「でも、この駅に降りたつてことは近くに住んでるかもしれないし、また会えるかなあ

……………」

その時はちゃんと連絡先を聞いてお礼をするのだと決心するのであった。

## プロローグ 4

さて、ついに時は満ちた。

俺は、ラブレター（疑惑有り）が明記された場所である、中央公園の噴水広場で待機していた。

だが、困ったことに時間が書かれていなかった。仕方がないので朝早くからスタンバってます。

「ブエクシユツン！ ああ、花粉症には辛い時期だったのでよー。はよ来んかいなあー。いや、誰かがモテ絶頂期の俺様に妬いて噂してるのだな！ そうかそうか、そうに違いなの異論は認める」

鼻の下を吸りながらそんなこんなを呟き続けることさらに半日が経った……。

「ソシテダレモイナクナツタ」

日は暮れ、夕方に流れる切なげなメロデーが俺の Heart（ハート）を無遠慮に Hurt（ハートウ）する。公園にはお手で繋いでお家に帰る親と子供ばかり。

「美紀のいつてた通りだった……」

これでまた黒歴史が出来てしまった。やはりモテ期などそう都合よく訪れる筈がないのだ。そんなもの所詮はモテない男の懇願か在りもしない上っ面の恋愛（笑）好きの女子の作り話に過ぎない。

「帰ろう……。僕はもう疲れたよパトラッシュユ……」

今ならパトにラッシュユされても後悔はない。いや、パトって誰だよおい。

世界の終わりのような顔で帰路に着こうとする。恐らく周囲の奥様方が「見ちゃダメ変なのが移る！」って子供の目を手で覆い隠してるのは夢じゃないだろう。ああ、本当俺ってなんなんだー？

「クスス……」

ピコーン！俺のぼっちリーダーが侮辱の嗤いをサーチ！どこかで聞き覚えがあるぞ。

嗤い声の発生源を辿ると見知った……。というほどではないが俺が認知している存在であった。

「お前ら……。」

「あつ、ヤバイ」

女子二人になんか何でこいつここにいんのって顔されたがそれはこっち台詞である。

彼女らは数秒間アイコンタクトをする。すると、1つ頷きあって走り出した。

んん？ヤバイ。走って逃げ出す……。これは……。

「君らだったんだね！スウィートガールズ!? 何怖がることはない。さあ、この胸に飛び込んでおいで子猫ちゃん達ツツツ」

捲し立てるように咆哮し、陸上部もかくやという速度のダツシユで彼女達をパヤパヤ追いかける。

「違うっつうのー！あんたなんかに興味あるわけないでしょ！キモいつ！追っかけてくんなああああ！」

「いやああああああつっ！」

絶叫する少女達。

「ハツハツハツハ！照れ隠しのつもりかなー。そんなツンツンしてるとこもキュートだよおおおおおー」

完全に変態な俺。

このカオスな鬼ごっこは彼女達の体力が尽きるまで続いた。はあ…はあ…。全然よゆうー息なんか上がってない…。よう…。はあ…。

「さあ、追い詰めたよマイハニー達？★」

「来ないで……。キモい……。有り得ない……」

「こんなことになるなら最初から辞めとけばよかった……」

全くです。だが、もう遅い漢の純情を貶してくれた御代は高いのだ。

「腐腐腐腐……。さて、俺が魅力が眩し過ぎて逃げたんじやないならどうして逃げ出したのか詳しくOHANASHIしようではないかあゝ」

含みのある笑みを浮かべ、嫌らしくゆっくりジワジワと一步一步噛み締める如く少女達に弄り寄ってゆく。

距離が近づく都度に悲鳴を上げ、ブルブルと全身を震わせる。

一步。

二歩。

三歩……。

あつという間に二人の眼前に迫る。

「さあ、年貢の納め時だよ？」

一方の少女は完全に震えて涙目なまでであるが、もう一方は激しく歯軋りをさせている。

俺の様な底辺ぼつちにここまで追い詰められプライドが傷付いたのだろう。ざまー

！

苦い顔をしている少女が口を開く。

「あんたが全部悪いのよ！偽物のラブレター作ってあんたの下駄箱に入れて、反応見て

遊んでたのよ。自分にモテ期が来てたなんて本気になってたあんたの姿はお笑いだったわー！滑稽なここの上ないわね！」

滑稽……。あ、烏骨鶏かあれ美味しいよね……。

俺は膝を着いて崩れてしまった。

ああそうか……。それが少数民族ぼっちの定めなのか……。

「あ……」

「何なんか文句でもー」

「フオワアアアアアアアアアア!!」

俺氏発狂しました。

急に立ち上がると先程まで疲弊していたのが嘘のような全力疾走でその場を去る。

「嘘だ嘘だ嘘だああああん！」

顔を出し始めたお月様に向かって叫ぶ。

月が照らすのは俺の傷心かはたまた二人の小悪魔か。ともあれ、佐藤深海の姿をその後見たものは春休みが明けるまでいなかった。